

## 脊椎

座長：瀬 本 喜 啓

聖隷佐倉市民病院の小谷らから「10 歳未満の脊柱側弯症における貯血式自己血の有用性」についての研究発表があった。growing rod に関する手術に際して自己血輸血を行い、1 回の採血は平均 147.6 ml (100~200 ml), 総貯血量は平均 274.8 ml で、体重の少ない小児の採血量の目安となる数値である。

採血時の問題として、気分不良、発熱、貧血があった。出血は平均 166.5 ml で同種血輸血が必要となった症例はなく、小児に対する自己血輸血は十分可能であり、同種血輸血回避に有効であったと報告した。

獨協医科大学からは大江らが「早期発症側弯症に対する growing rod 法の治療経過と先行的 foundation 作成術の意義」について報告した。growing rod の設置前に上下位固定端各 1 椎間にアンカーを設置し単椎間固定を行う先行的 foundation 作成術 (FO) を行った。

growing rod 法はインプラント破損、脱転が問題であるが FO を先行させることにより安定した固定アンカーが獲得でき、外固定なしに良好な変形矯正位と脊柱成長が維持されたと報告した。

大阪医療センターの長本らは、「脊髄髄膜瘤に伴う重度脊柱後弯変形に対する後弯部切除 (Kyphectomy) 6 例の治療経験」を発表した。後弯角は術前平均 131.2° から術後には平均 55.5° まで改善を認めた。最終診察時術前と比較して平均 30.8° の後傾改善を維持していた。術後合併症は矯正損失が 3 例、皮膚障害が 3 例、深部感染が 1 例で生じ、合計 15 回の再手術を要したが、最終診察時には全例でおおむね矯正は保持できていた。

はまなす医療療育センターの盛島らは「当科受診の 10 歳未満脊柱側弯症児の経過」を発表した。10 歳未満児 420 例を対象とし、紹介元を母集団とした偽陽性率は、整形外科約 20%、小児科約 30%、乳幼児健診約 50%、知人・親族の判断約 60%、学校・幼稚園・保育園 70% であった。これらから特発性 160 例、先天性 26 例、症候性 20 例が発見された。乳幼児側弯症の rib-vertebral angle 左右差による進行予測での合致例は少なかった。治療により Cobb 角 20° 以下となっても、再び側弯が進行する例もあり、思春期前に装具療法を終えてもその後の経過観察が重要であると考えられた。